

高さを見るが如くにしてはかるを雪の竿といふ、

〔北越雪譜初編上〕雪竿 高田御城大手先の廣場に、木を方に削り尺を記して建給ふ、是を雪竿と

いふ、長一丈也、雪の深淺公税に係るを以てなるべし、高田の俳友楓石子よりの書翰に天保五年の仲冬

雪竿を見れば、當地の雪、此節一丈に餘れりといひ來れり、雪竿といへば越後の事として、俳句にも見えたれど、此國に於て高田の外、无用の雪竿を建る處、昔は去らず、今はなし、風雅をもつて我

國に遊ぶ人、雪中を避て三夏の頃、此地を踏ゆる、越路の雪を去らず、然るに越路の雪を、言の葉につくる作意ゆるたがふ事ありて、我國後の心には笑ふべきが多し、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十四年十一月八日甲戌、通夕雪未止、右大臣已下參議已上、於侍從所賞雪會、飲詔以內藏寮綿賜之、各有差侍從五位以上亦預資焉、

〔續世繼四伏見の雪のあした〕大殿師實の伏見へおはしましたりけるも、すゞろなる所へはおは

しますまじきに、雪のふりたりけるつとめて、俊綱がいたく伏みふけらかすに、にはかにゆきて  
 みると、はりまのかみもろのふといふ人ばかり御ともにて、にはかにわたらせ給たりければ、  
 おもひもよらぬことにて、かどをた、きけれど、むごにあけざりければ、人々いかにとおもひけ  
 り、かばかりの雪のあしたに、さらぬ人の家ならんにて、だに、かやうのをりふじなどは、そのよう  
 いあるべきに、いはんや殿のわたり給へるに、かたぐ、おもはずに思へるに、あけたるものに、を  
 そくあけたるよし、かふづありければ、雪をふみ侍らじとて、山をめぐり侍と申ければ、もとより  
 あけまうけ、又とりあへずいそぎあけたらんよりも、ねんにけふあるよし、人々いひけるとか、修  
 理のかみ綱後さはぎいで、雪御らんじて、御ものがたりなどせさせ給ほどに、もろのぶかくわた  
 らせ給たるに、いで去かるべきあるじなど、つかまつれともよをしければ、俊綱いまにへどのま  
 いら侍なんと申ければ、人にも去られで、わたらせ給たれば、にへ殿まいることあるまじ、日もや